



日本百將傳一夕話

九

13
3566
9



門 13
號 3566
卷 9



日本百將傳一夕話卷之九

東都

目錄

- 護良親王
- 源尊氏
- 源義貞
- 楠正成
- 那和長年
- 赤松圓心

松亭金水謹撰

日本百將傳一夕話卷之九目錄

○目

洋三三三三

早稲田大學圖書館
34.6.3
藏書

○ 宇都宮公綱

○ 源顯家

以上八將目錄終

○ 源顯家
○ 源顯家
○ 源顯家
○ 源顯家
○ 源顯家
○ 源顯家
○ 源顯家
○ 源顯家

目錄

休亭全木

日本書紀卷之六

人皇九十四代

後醍醐天皇

御諱尊治

尊良親王

世良親王

護良親王

征夷大將軍

母民部卿三任命

号大塔宮

尊雲淡親王還俗

護良親王

人皇九十四代 後醍醐帝建武二年癸未也
今安政三迫 五百三十二年 歲

護良親王者

後醍醐帝之子也元

弘之騷擾在吉野壘敵急攻逃去匿

山中其際運密策數矣國寧後為征

夷將軍遂被譖殺

佛門不入入敵山の座王より一も積年武家の藩恣と怒り。天皇と勅り奉り
兵て奉り多き難難を嘗て王室恢復の功を主り人として。佛人の長吉且任
の計略に罹る功ありとも秘せり。終小階居の為に殺せしは。天命の不幸

護良親王の治

本朝通記の如く、後醍醐天皇の第六子なり。少子系統記を案ずるに上侍小若久が、
 第一皇子にまゝの如く、執事長官を兼ねて、比叡の府王として、
 尊雲法親王と號し、ひがま下鎌倉の執権北條相模守平高時満忠に、
 皇統を譲り、我々を養ひて天下の政事大を委ね、この間にあらば、性承久の礼より、
 皇室衰へて、武家の権威熾る。この親王、且圓頂深衣の身となり、世のひより、
 極くまじくけしき、世を餘所に、その小若久の時、天皇に勅め、奉る鎌倉を發、
 王道に復すの事と再々密に謀る。天皇親に心を決し、便置の者を遣り、
 のちに土波頼遠が、密に密に、日野資朝後基等鎌倉に、
 の依及小左近せしむる。その時の事実、太平記小若久の傳に、
 金水梅るに、天皇の召、鎌倉更一朝の事あり。文保元年九月、依入、

崩御の、東宮尊治位に即り。是は後醍醐天皇なり。かくて立太子あり。法
 親王の、先皇の御孫、後深州の兩院皇統を三流に分て、即位し、
 の正統を、勅使關東、下向す。帝の子護良親王を、奉りて、
 ける小高時を、聽ひて、竟不。後一條院の皇子、邦良を、
 此の御子の、先皇の御孫、を、護良親王と、
 此の御子の、先皇の御孫、を、護良親王と、
 て、三流に分て、執柄を、五に分て、その權を、奪ひ、
 皇の位を、
 帝北條氏が、
 推すべし。頻に内慮を、廻る、于、
 〇二 詳 註 書 院 友



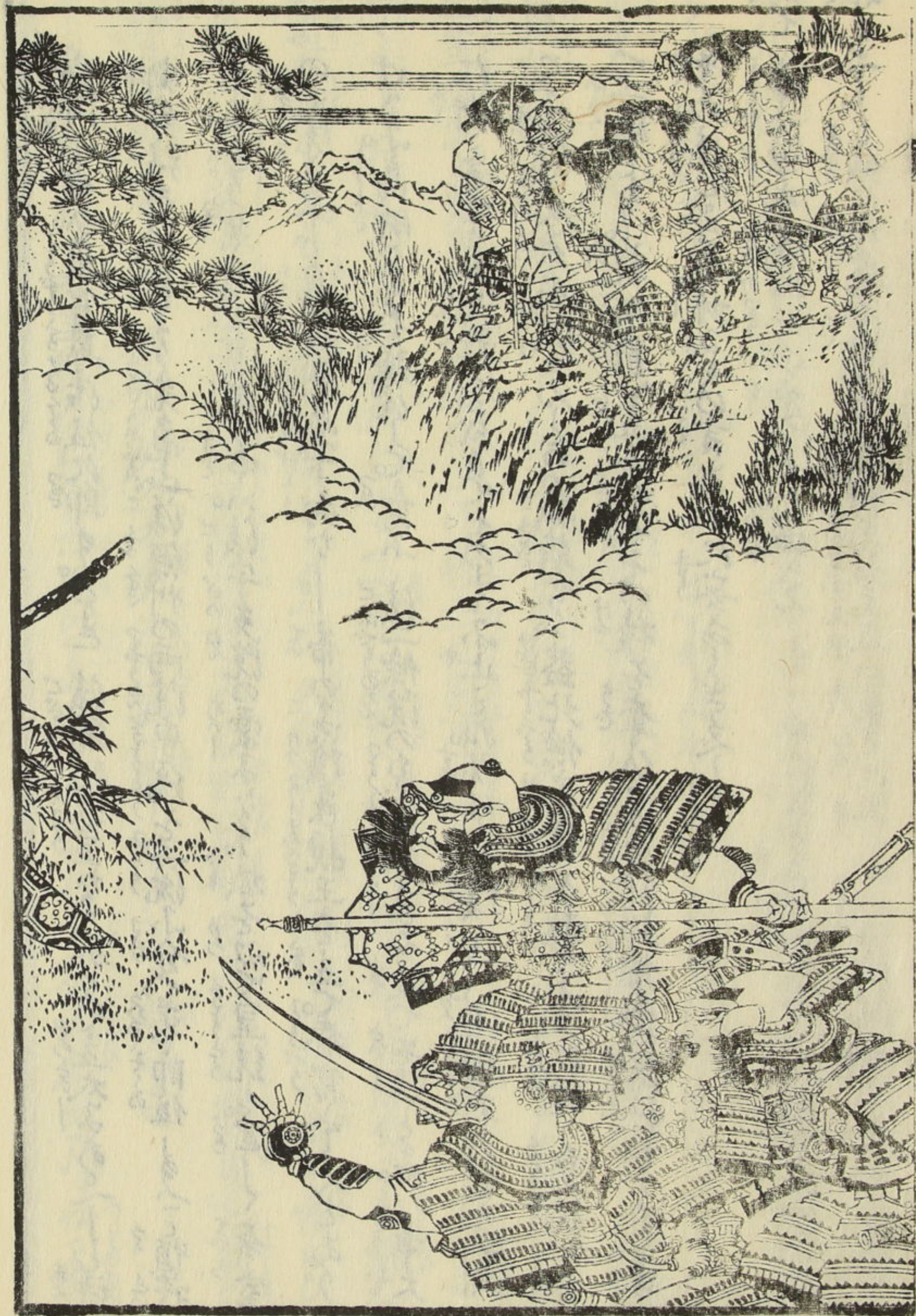
村
上
上

護良親王
熊野落村上
義光勇
現

百將傳一

三

洋玉堂藏板



百將傳一

群丑堂藏板

房に告ぐ。宋の大傷朱晦菴の四書集注此より六年前本朝に入る世傷のまゝなるの
 あら。我幸ひ小長を得て深くこそを尊信を今君小こまを借さん必ひをこの書を買
 たり。藤房ははくしものどその堂同傷併を混ぶて經書小一たふに故小長信と合せし
 せん。さうして廣信は今ふたで朱注を漢の師祖といえむ作ぎ纂ふべし。同話休題與小
 大徳宮の車蹟に於ける太平記小載て予遺たり。さうして今復しをうのそん。悉く教皇言なり。
 然るもこの親王小園む村と義夫父子の忠義深く其心まるとあり。依てまるとあり
 抄公一教皇の傳小合せて以て后の后子を勵さんとて于時正慶元年坐置の皇居教の
 為小取らる。天皇徳政小遷さる。こふたで大徳宮の信潛と藏さる。一宗院の候人按
 察法殿好身ある皇太子のこ小隠れをわと五百騎を平て取免とて困む身も取免の
 槍小かくと逃さる。紀及の方落りよあの時左右小従ふ者先林房玄尊。赤松則祐
 本寺相模村と義夫田彦七に同八郎。平賀之郎。園本之河房武義房等僅に九人止

依の貌小打拾險阻艱難を経て紀伊國十津川の邑小到る。豪士戸野兵衛曾子に通
 思皇を築て防護せり。戸野の伯父ある竹原八郎も心を合し皇子と我故小入る。小坐ま
 と半平可熊野の別家定編かる者こまてて大小様き竹原が事終に終ひ。その子平本
 購買と合つ。皇太子と源りんとまると數回自りまるとわとて思ひ出さる。野のも小到る。この
 時羊流莊司。皇太子を推さんと新園と居て。皇太子は後つ因て進退なまると。如くまう羊流と
 現で密小と通らんと。羊流が故小到り利害と現小羊流つや。肯ぞ我武令と守り
 て皇太子と侍の擧小せんと。職なり。然れども思くも憐れとてもの窮鳥の懐に入らんと。
 我槍とちとと思ひび。さうして従老の中一兩輩の首と斬て其ららる。さうして君の璽章と
 揚り。されば開てり。武家以謝せん。さうして主従擧とちて。鎌倉へ送る。一と侍者先人ふ
 のひけ。赤松則祐進と出老をさると命と致ひ。すまの守り所なり。頑く我首と切く。彼
 が望も小任り。人と言ひ。終に佩刀と捨て。既に自らう。首切ると。平賀と郎。遠て止る。想ふ。

と密に城の背へ廻るに果して空旗とすもの三人一名もあらずれば大不敵に退きの軍と相思
 てさめて悲び入るその便宜と俟やどん就に退き小軍始まり関の妻夫叫びの音も小把さう
 小受けけし時分をたんと若菜九間を吐と揚ふらり城中の兵をさして破る櫓もに教
 ありし人数を分て防がんとして堂下橋へ準備せる投炬火小大を懸し城中の陣へ投るもあ
 入るこれ折るも夜半の山小端十方に飛散りて猛火燃小燃あがる城兵も海嶺しといど
 前後不敵と度火小包まると如何とするも。賊兵大小勇とす。勝小勇と進し入る。
 老官殿近く通。大橋宮のこまて波自身長刀を掛るひ二十餘輩の精兵と左右に從へ
 て去博殺とす。数回勇氣繁然とてまううらび東兵大小遊き廢く。其まじり大軍なり。
 官中數箇所虜と負るひ鮮血流とて潰小盈まで。言突自如とて扱ひもやうび最
 期の酒宴を催し。時小本寺の相換房。賊の首を拜小貫き。坐して起てが採といふ。戈進
 劍戟を降して電光のごとく。聲若雷を轟ひて。春雨小似らう然りとす。とも天幸の勢も近

うび却て修羅の身と破。と朝敵のごとく。淫ひ二と通練之せ。一坐の軍兵俱小まで。夫は
 同者小淫ひけり。ま下猛火燃小あうりて。煙眼と蔽へ。更小角とせ。聞の奪耳と賣けど。
 まいりて。びざる如し。士卒死をたんと。段まらざり。恭然とて。もあせ。ま下村と夫
 四所。後光親王の山前小畏り。敵も近づき。又。頼。落させ。のへ。其。賊の大軍。必定
 四跡と暮ひさ。と。ま。所。君の糧力。臣小揚へ。は。薄。冒。と。小死。その。同小
 落伸のへ。と。小。敵。の。い。ど。汝。小。從。ひ。し。南。紀。の。厄。小。難。難。と。膏。今。の。危。急。の。期。に
 條。と。汝。と。殺。と。我。活。ん。や。汝。死。さ。ば。我。も。死。せ。ん。と。敢。て。許。し。ら。ば。後。光。大。不。練。め。て。い。た。君。天
 下の為に大軍と起。今利さう。困小遭の。君若此。知小死。の。死。有。て。恢復。の。功。を
 あまのひえ。君の國家の大軍に禁まら。宣微信と。併。し。う。ん。や。と。同。う。起。て。親。王。の。著
 の。所。の。糧。と。解。親。王。返。り。宣。ふ。や。我。若。死。さ。ば。泉。下。に。契。ら。ま。幸。ひ。し。功。あ。ら。ん。と。眞
 福と吊んと。落れと。違。と。り。長。老。大。不。敵。び。て。親。王。の。糧。を。著。し。日。の。旗。と。傳。て。擲。小。堂。の。大

保官と稱して自殺の四方の軍勢一所不集り。親王の弟は大河の老
 小まはこ小兄弟九親王の故と通じりて。五百餘兵を率て跡を殺ひ終小親王に迎ふ。義
 光の子孫人長隆曲道に。とて支え教を斬ると數十人賊兵怖まて近づくは長隆と小防ぐ
 良半時餘に。とて身も敵酋所の傷を負け。とて今も名はまて。官も遠に落る。ん
 とて。林藪の中に入。自殺して失せしけり。是より尙花人長隆父と記を俱せんとひ。義光
 看て大河の同じ死さるるの爲小死せ。と小死して何の益ある。鳥辭の白癡と詈ら。と。は。父
 の死と果て親王小死ひける。今果て。の如く。父が遺後と果しけり。

按るに本朝通記の父子と濟して。義光初從皇子自廻歷南紀之間
 以往百戰万危不顧其身遂以命代君之大事。真千古之英雄可謂猶步
 前後護良先以義光比宮黜官黜猶有勇無義如義光父子勇也忠也
 轟然傳萬世漢有紀信我朝有義光孰人謂其忠之雄劣乎。と。ん。え

方

是より後大塔宮の楠正公計らひて。河内國金剛山の奥觀心寺に。思を奉は。弟從
 妻子に。知るせ。と。し。え。かくて。帝の隠岐に遷。と。在。ける。と。天運順豫の時。や。未。に
 けんえ。弘。二。年。後。二。月。下旬。依。木。富。士。名。判。官。後。細。心。を。願。け。て。先。帝。を。救。ひ。出。さ。ん。と。か。り
 ける。より。雲。を。截。て。崖。高。貞。名。和。長。年。一。年。後。等。を。帝。ら。ひ。て。先。帝。を。竊。ひ。出。し。私。上。の。故
 小入。是。奉。は。ら。ふ。故。て。四。國。中。國。西。國。の。結。さ。り。と。も。く。と。多。く。官。軍。に。率。け。り。され。は。東。西。一
 時。に。礼。は。新。田。小。太郎。源。資。貞。東。に。兵。を。奉。て。百。戰。百。勝。餘。念。に。う。ち。入。り。北。條。五。郎。を。賊
 せり。因。て。先。帝。重。祚。の。一。人。徳。氏。泰。平。の。日。小。遭。と。飲。ぶ。茶。に。護。身。親。王。の。兵。と。大。和。の。志
 貴。小。毛。一。我。衣。と。解。け。浴。小。入。の。入。り。因。て。坊。門。清。忠。と。勅。使。と。て。今。天。下。小。飯。以。我。衣。と。稱
 兵。と。備。外。小。あ。ら。へ。何。の。事。も。四。海。禮。礼。の。その。際。に。我。衣。と。救。り。為。小。我。衣。と。着。り。し。も。
 世。流。に。大。平。に。及。び。ぬ。且。六。速。に。境。推。と。解。て。門。跡。相。承。の。業。と。受。べ。し。と。詔。を。若。ら。は。護。身。良

對へり。海内一時に驚く。聖運忽に開き。陛下の聖徳にあり。この世も且に微臣が功
 小の事なり。然るに臣利高氏の一戦の功小。誇る。弟人の上にも。欲は。今その勢の微
 なる。ちの縁せ。せん。は。後必大なる禍ひありん。を。過る。を。塞は。は。未か。なる。は。河と
 なる。く。榮。と。と。と。救。り。せ。と。奈。何。せん。一。賊。滅。び。一。賊。あり。と。前。門。虎。と。拒
 して。後。門。狼。と。進。む。る。を。因。て。臣。が。武。を。解。さ。る。所。州。小。宗。一。之。且。平。氏。頼。に。滅。ぶ。と。と。
 後。賊。い。ま。も。鐵。走。る。く。び。牙。を。竄。一。陣。を。窺。ふ。の。時。小。宗。つ。て。信。休。に。還。ら。る。朝。家。小。平。賊
 と。して。衛。り。ん。老。ハ。誰。也。長。思。衣。て。一。門。跡。を。守。は。と。武。臣。小。元。帥。と。して。朝。家。を。衛。は。と。そ
 本。家。の。用。執。事。と。名。と。清。忠。と。目。を。報。命。し。奉。と。且。と。散。り。あり。く。高。氏。が。不。忠。何。と。あ。あ。
 系。還。つ。て。功。臣。と。刑。せ。て。天下。の。士。愈。怒。り。と。生。し。再。び。初。礼。の。場。を。開。く。と。の。と。さ。り。ん。あ。え
 ぐ。武。臣。小。元。帥。と。し。ん。と。の。請。小。宗。と。し。別。小。勅。使。を。奉。ら。し。と。征。夫。大。將。軍。に。任
 じ。の。因。て。復。良。兵。を。率。て。不。日。に。入。洛。し。の。と。と。か。く。後。も。る。氏。兄弟。が。自。立。の。志。あり。

家。一。常。に。兵。と。煉。て。練。練。せ。ん。と。の。尊。氏。正。慶。二。年。臣。利。高。氏。派。の。後。小。宗。一。と。して。准。后。に。駒
 し。勢。も。小。宗。親。王。を。死。ん。と。の。辨。任。至。り。盡。せ。り。と。小。宗。に。送。り。還。す。る。官。と。遠。く。小。宗。に。請
 と。し。復。良。兵。と。大。小。慈。へ。誓。書。と。訣。と。の。美。心。を。さ。誠。を。陳。し。の。と。と。の。信。者。の。と。あり。陣
 ら。し。と。遂。に。臣。利。高。氏。を。一。之。獲。良。と。獲。送。せ。り。の。孫。倉。三。階。堂。の。獄。中。に。下。り。親。王。罪。に
 あ。り。て。竄。せ。り。と。慈。へ。悲。の。便。宜。を。以。て。その。旨。と。慈。訴。す。と。い。も。依。人。道。に。堪。る。と。と。
 さ。り。に。散。り。不。達。さ。る。と。と。奉。弟。八。の。自。子。成。良。親。王。と。して。征。夫。將。軍。と。し。復。良。兵
 結。て。孫。倉。に。着。り。と。進。軍。を。り。て。執。權。と。す。と。進。軍。自。威。を。披。藉。と。す。と。推。勢。と。表。ひ
 けり。是。建。武。元。年。夏。五。月。小。宗。の。翌。建。武。二。年。七。月。北。條。時。行。信。濃。に。潛。り。平。族
 の。存。意。を。確。し。信。州。小。宗。を。奉。ぐ。進。軍。大。小。宗。を。討。つ。と。成。川。小。山。を。取。り。て。と。と。を。防。せ。り
 戦。り。む。る。に。時。行。相。撲。登。高。之。部。の。戦。勢。強。く。兩。將。竟。に。討。死。し。故。に。孫。倉。に。入。り。た。り。び
 進。軍。支。さ。り。と。と。得。び。將。軍。官。を。携。え。て。孫。倉。を。没。落。し。進。軍。心。小。宗。と。と。今。時。行。登。り

一時我勢を張るといふ。滅亡せんと我をば。家家を盡むの獨この獲良の如く
 この紛し不夫ありん。その臣測事守をて。かの敵に到らぬ。賺してこそを裁
 けり。嗚呼悲き。國家の為不功業を。五のえども。我せ。空しく。佞者の舌。頭は。罹る。
 史を。侯りの。ら。小至つて。維く。長大息せ。る。ま。親王の圖。賢人の。忠孝排。君父難。
 折衝威何。侃々。彼婦舌。利於。及。請室書。有。孰信。
 接る。ん。本。朝。通。記。の。り。云。く。尊。氏。至。存。異。志。欲。早。悟。除。其。暴。可。謂。明。矣。惜。
 哉。其。計。輕。舉。而。傳。聞。敵。家。良。策。却。害。其。身。護。良。實。欲。戮。足。利。之。暴。
 潛。志。不。顯。其。情。審。彼。反。謀。之。實。奏。天。皇。而。後。討。之。可。也。皇。子。之。計。慮。不。至。
 于。斯。以。如。清。忠。之。姦。卿。卒。爾。奏。大。事。曷。直。義。之。邪。佞。准。后。之。功。言。不。
 構。護。口。拒。其。奏。乎。直。義。准。后。之。惡。固。不。足。道。護。良。亦。招。延。其。讒。者。歟。
 云。く。と。又。え。り。後。學。の。人。味。り。べ。し。

源尊氏者 清和源氏之胃也元弘之亂奉
 後醍醐天皇之詔攻破六波羅使翠花
 歸洛其後東畧平北條餘寇乘其勢運自
 稱征夷大將軍以入京既而奉 光明帝與
 義貞正成相戰有年遂得成功其餘軍務
 多艱難備嘗四海漸平累世開幕府

八幡太郎義家
 四男 式部大輔
 源義國 從五位下
 上野國新田三住ス
 義重 新田大炊
 國康 左二門督
 義康 左衛門督
 七代 足利三郎
 貞氏 從四位下
 元弘元年九月五日卒

源尊氏

人皇八代 崇光帝延文三年薨
 今安政三辰迄 四百九十九年歲

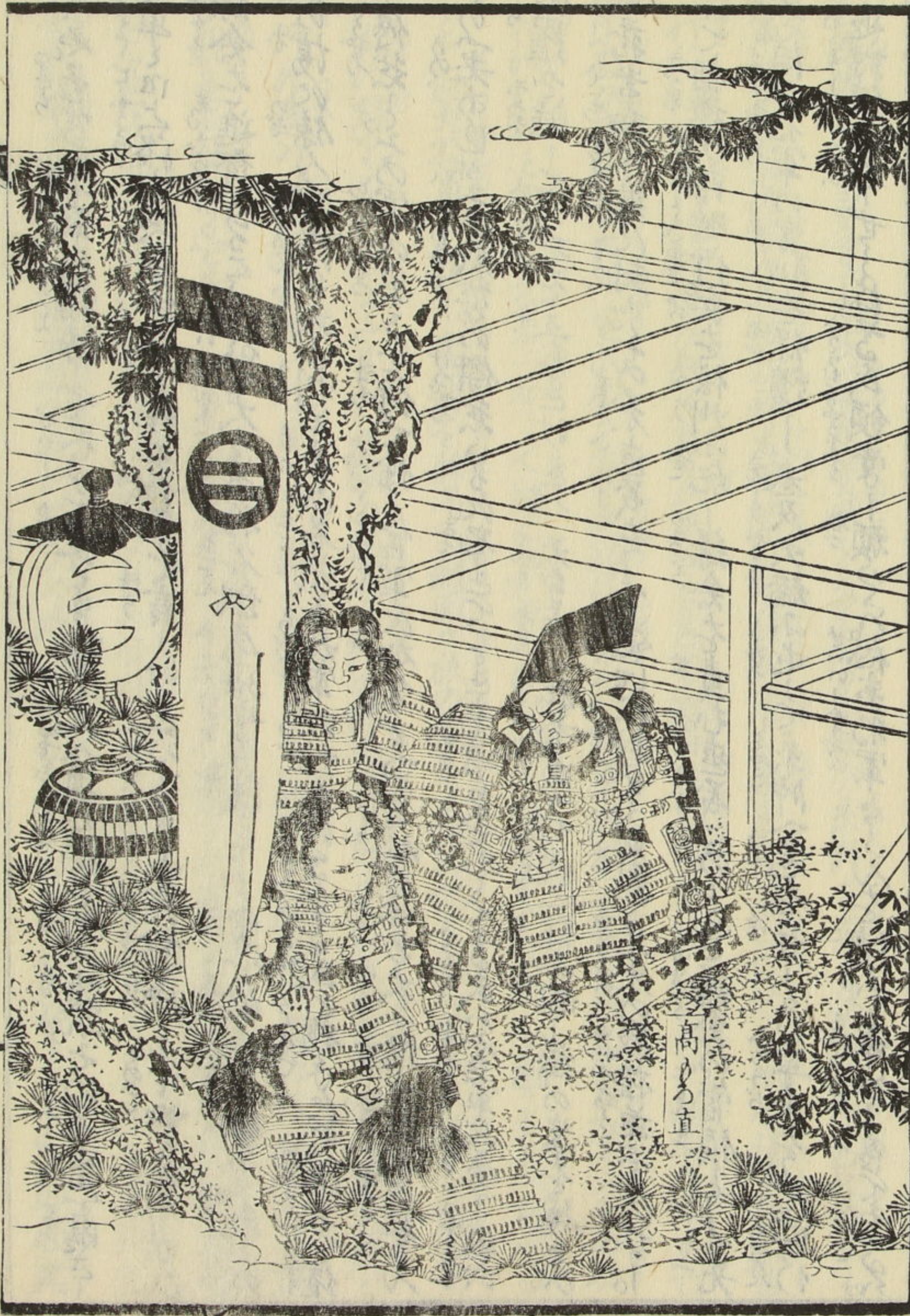
尊氏 治部大輔
 正三位
 推大納言征夷大
 將軍贈從一位太
 政大臣
 延文三年四月晦日
 薨五十四歲
 等持院如義仁天皇

源尊氏者 清和源氏之胃也元弘之亂奉
 後醍醐天皇之詔攻破六波羅使翠花
 歸洛其後東畧平北條餘寇乘其勢運自
 稱征夷大將軍以入京既而奉 光明帝與
 義貞正成相戰有年遂得成功其餘軍務
 多艱難備嘗四海漸平累世開幕府

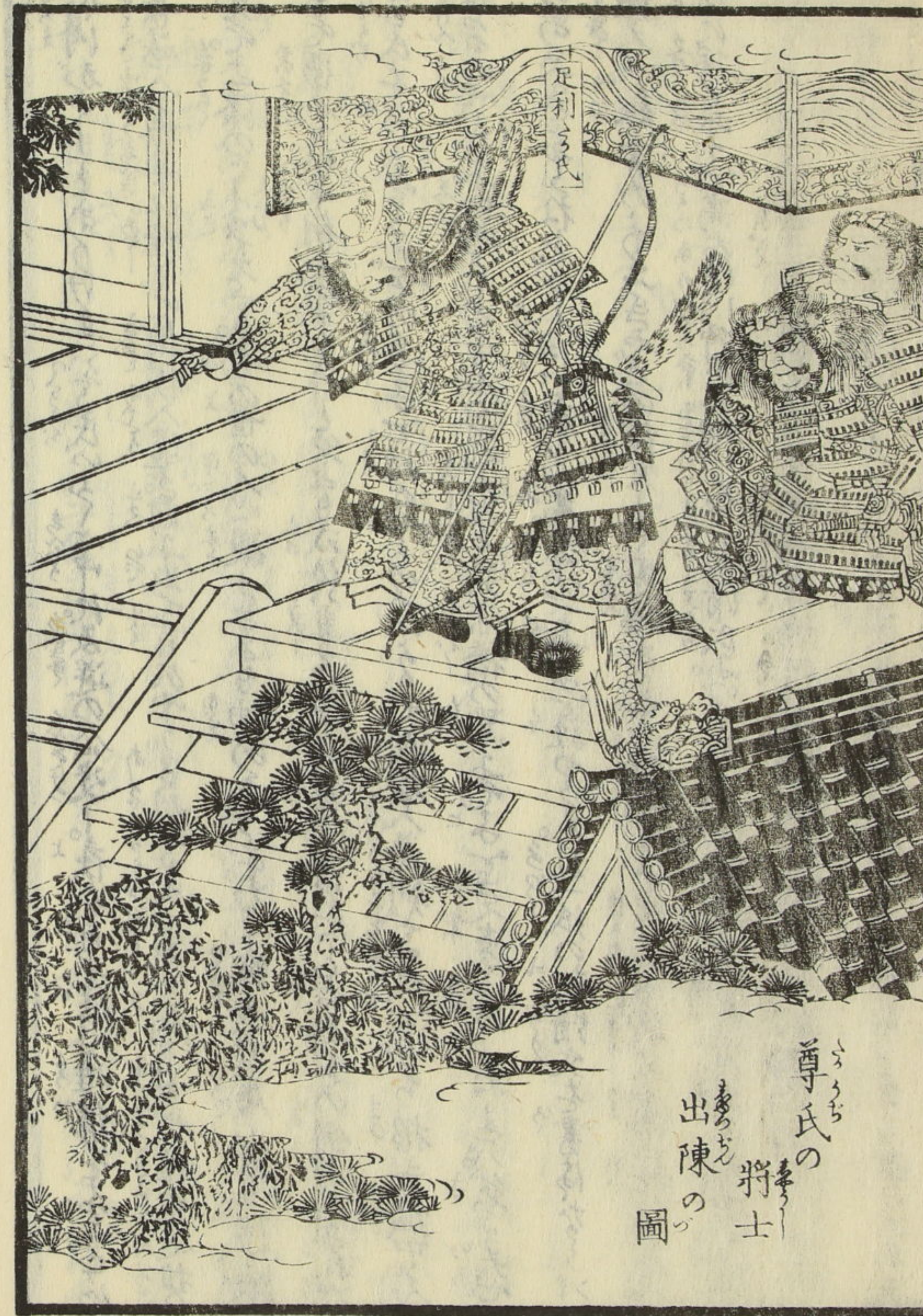
源尊氏の始

家系の前は久し如く。於て元弘の亂死す。先帝船に倭幸す。四國西國の軍兵共
 逃く官軍に屠まる。六波羅の住進頼朝なり。とて小園に相模入道とてを尊氏人
 が為名。越後守を大守の位と。足利治部大輔高氏を攝子の位と。て連次奉向あ
 べきよりなり。然るに高氏の父の妻に居て。いまだ健に七日と経ば。悲歎の淚乾き。中
 び殊不所勞に侵さる。紀居もまご安らざる。小波向の權臣頼朝となり。高氏心中
 かならば。憤りて食ら。時の幸不幸にまご。詮方あり。といひ。我が源家の名族
 あり。二代將軍の連枝なり。この縁を知り。一度ハ君臣の義を以て。是を以て。是の沙汰
 及び。身の不肖。といひ。偏に入道の禰若。所詮と路。さる。わ。な。ら。ば。一。家。竭
 して。洛に上り。先帝の所方。い。ま。と。西。六。波。羅。を。滅。して。家。の。安。危。を。定。めん。と。い。ひ。つ。き
 のひけり。相模入道か。とも。わ。ら。び。二。藤。左。衛。門。尉。を。使。し。も。と。か。く。上。洛。の。途。引。及。は。り。

心得がごとく。ありけ。且。高。氏。い。ふ。中。に。及。逆。の。企。図。一。夜。を。目。小。庭。に。准。備。を。す。と。い。ひ
 長。崎。入。道。圓。光。怪。て。相。模。入。道。前。小。出。て。言。ひ。や。う。足。利。言。氏。一。家。を。竭。し。女。性。推。見。進。勢
 えて。上。洛。の。途。引。及。は。り。今。の。世。の。人心。變。じ。小。波。向。あり。ま。む。我。必。し。屠。る。は。れ。も。血。と。厭
 して。關。合。ひ。本。朝。の。と。と。り。と。い。ひ。父。も。或。ひ。し。妻。子。を。て。質。と。と。ま。て。と。古。今。の。例。あり。され。ば
 高。氏。を。屠。る。と。い。ふ。と。その。妻。子。を。狂。め。入。り。の。ま。よ。う。く。相。模。入。道。則。言。氏。と。い。ち。招。き。滅。中。ん
 せ。ら。の。の。ま。よ。う。く。相。模。入。道。前。小。出。て。言。ひ。や。う。足。利。言。氏。一。家。を。竭。し。女。性。推。見。進。勢
 の。あ。ら。ま。り。あ。ら。ね。ど。人。に。と。塞。ぐ。人。為。地。妻。子。を。狂。め。入。り。の。ま。よ。う。く。相。模。入。道。則。言。氏。と。い。ち。招。き。滅。中。ん
 雖。人。う。類。ふ。の。あ。ら。ま。り。あ。ら。ね。ど。人。に。と。塞。ぐ。人。為。地。妻。子。を。狂。め。入。り。の。ま。よ。う。く。相。模。入。道。則。言。氏。と。い。ち。招。き。滅。中。ん
 然。に。得。て。地。を。高。氏。傳。し。神。事。を。細。川。右。衛。門。清。氏。小。の。あ。ら。ま。り。あ。ら。ね。ど。人。に。と。塞。ぐ。人。為。地。妻。子。を。狂。め。入。り。の。ま。よ。う。く。相。模。入。道。則。言。氏。と。い。ち。招。き。滅。中。ん
 け。い。や。の。あ。ら。ま。り。あ。ら。ね。ど。人。に。と。塞。ぐ。人。為。地。妻。子。を。狂。め。入。り。の。ま。よ。う。く。相。模。入。道。則。言。氏。と。い。ち。招。き。滅。中。ん
 後。念。ふ。運。の。あ。ら。ま。り。あ。ら。ね。ど。人。に。と。塞。ぐ。人。為。地。妻。子。を。狂。め。入。り。の。ま。よ。う。く。相。模。入。道。則。言。氏。と。い。ち。招。き。滅。中。ん



高村の直



足利三氏

尊氏の
將士の
出陣の
圖

へきも是等の小事に猶勝して大なる過るべし入道刀狩多の隨ふその不審を腹さ
 て早と上洛のあはきおひと理を盡して言けしむる氏竟心で決しそ如くはりのひ
 孫念を進發するこふ放て大子の名を裁尾張守も後と軍を促して上洛あり既我
 ひの場に候へ東軍大小利を失ひ名裁も軍に討まけるる氏も擧子にて酒宴を催
 し傳然しその軍の果るを得て後官軍に加りるへ自餘の味方大小討り既に追入
 との老あじかその威勢の傑然たるに思まてこまを逃らざかてそ氏に官軍に屬し兩六
 彼羅を滅して大功を立りしけしむ。天皇太子松譽ありて從之位小叙し海の名を賜まひ
 武花若陸下總に封しその弟連長をて遠江に封せざる圍て兄弟の威權並ぶりのかり
 かくて相模次郎時行兵を信州小紀孫念を責む連長このとき孫念の管領とて元
 勢之圍て將軍の官誠を保護し参及夫禰小屯とて系師へ急を告り尊氏をて時行
 の追討使を命ぜりはる氏領軍一頼りて征夷將軍とて人を請ふ。帝少一召くまらる。

功の深淺不極ききあり。とま關東管領とてま。そ氏軟び系師を發し。佐夜の中山に候ひが
 賊軍敗してその方人名裁武部大捕閉死し。強兵悉く遁走する。そ氏北をて逐て孫念に入は
 時行相模登高。海防逆ひ我々尊氏まてこまを敗は賊勢も消へて自殺し。餘黨遁走亡
 は小及び東州頼平定ひ。かくてそ氏功に誇り。初め系師を發する時征夷將軍の功
 の深淺に拠となり。然るを二舉して賊を平ぐ。その勲功大なり。今勅封を降るに及むと
 自ら征夷將軍と稱し。愛野を群小。新田が族の領する所の地を以て諸士に授く。新田義
 貞大に怒り。こまをまて是利の族の領する所の地を奪ふ。こふ放て兩家確執し。そ氏使と
 系師に遣り。奏状を捧げてそ貞を毀る。そ貞由まて奏状を捧げ。そ氏の詐偽をひ獲
 段親を裁まると告ぐ。天皇聲めてこまを怒り。大不怒り。そ貞にそ氏征伐の宣をを
 賜ふ。こまより再び濟礼となり。箱根竹の下の合戦をひ所々に發て挑ま。あは東軍勝利
 をまひそ氏連長敗走及び脱れ。そ氏に建長寺入り。別後深衣の姿となりて。罪を朝廷

此謝せんときり下是利連義の上杉重能と相謀て謀略を謀めんと是れ諸及に賜たる
 倫有るなりとそ氏小使せしむる尊氏拔きてとて執るに足利尊氏並義以下武威不降て
 皇威を挫んば縦面縛を軍に降り隠遁して衆を謝ひとの刑代を實はへるべしと尊氏
 こそをりて脱るべし然るに於て不令の限を拒まず小使とて法を脱て衣衣を著せ
 緒軍大小執ひて兵威めく登り頼て二十万の大軍に及ぶこの時竹の下の城ひに官軍
 ありしに
 大小利を失ふひて義貞東降へ引及ひ尊氏兄弟勢を震ひ東降に責めらるる及び驛
 へ八十万誘と私に因てその英氣を遊んが為 帝散らに道とる義貞正成とを供奉
 候とてより奇計謀略を廻り新田良利捕の之家各威威を震ひ勝負交り于時
 延元元年二月義貞頼家正成の二お杉州豊後河原に於てそ氏直後等と大に戦ひ竟
 候そ氏を追崩候そ氏遁して九段に走は正成義貞に謂てよく功の成難くして敗は易
 候て宜しくそ氏を殺べし備とを忽にせば尊氏再び威を震はんと勧めにけしと義貞

入す妻内共同侍の別を信三西を替の心正成慶徳もさうう愧はるおとと果さる
 所氏宗徳大官司の能入とより九段の諸おを招り且持内院の院宣と受同五月
 院宣を奉りて海陸より東降にむふ帝義貞正成小招くことをあぐこのとき正成
 兵庫に隠し義貞女嫁のきり出であぐんとすきと水陸の故まへ八十万誘とて衆
 寡敵まると能と正成清川に閉ひ死し義貞大小殿を以て小放て帝まて散らに遁
 しての尊氏散らに使をきて還幸あつんとを清ひける帝まを許しり義貞以て
 且怒と直に奏聞せ帝大小愧のひ別太子桓良を義貞に託せると北國小討うむ
 義貞激く怒を解て東宮を奉り北国にさし金誘の城に入はかくて帝散らする入路
 あり新連義との還幸を遣へ帝を花山院に幽し供奉の諸兵を禁烟あるその後兼池
 宇都宮等入遁して本宮に候とて奉同重氏に殺せらば帝そ氏が天心を知り潜に
 遁して吉野に入ると新に奉召をきて南朝と称しそ氏 光明院 豊をきて天子と

ことを北朝と稱しけり。然れども二種の神谷の南帝の方在于神号のく即位ある
 と前後にこの時のことありて後貞の北に在る。屢威威を震ひけり。是れ九の城を攻
 りに及び流矢に中つて死す。後兵猶に滅るに因て二の天子坐す。是れも天下大半北朝
 一掃し。足利氏の武威熾なり。征夷將軍の職不備。竟に十二代の基を用く。時時
 又南朝の諸將貞正成り。頭家長年七の餘の若士。其思を必ひ後存
 一の君の爲に命を懸く。智謀勇略共に備り。一も嗣る所。然れども皇運の目く小衰
 かり。ひて是より後五十餘年。吉野に皇居し。終に力竭て一掃し。足利氏の
 君に在りける。勅もまじく及後の人多く。既に將軍の弟連長。或は死に教たり。南
 朝へ降るとあり。衆人長に落し。是れも幕府を用き。子孫に傳ふ。實に足利氏の
 洪福なるべし。

所ての此事蹟太平記及び諸書に載て人備り。ことを知る。こゝ其服目を奉はのこ

八幡太郎義家三男
 義國宗領
 源義重 新田大炊
 義兼 新田藏人
 右大將頼朝朝時
 御一門隨一ナリ
 六代 新田一郎太郎
 朝氏
 義貞 左兵衛督
 義興 左兵衛佐
 義宗 左少將
 武藏守
 義頭 新田小太郎
 越後守
 左近衛中將正四位

源義貞

人皇九十七代 光明帝曆應元年卒
 今安政三辰迄 五百十九年成

源義貞者得 護良皇子之令旨而舉義

兵攻鎌倉屢戰屢勝不逾月而高時伏誅

後醍醐帝再踐寶位義貞之功不少未

幾足利氏作乱義貞秉 勅征之連年百

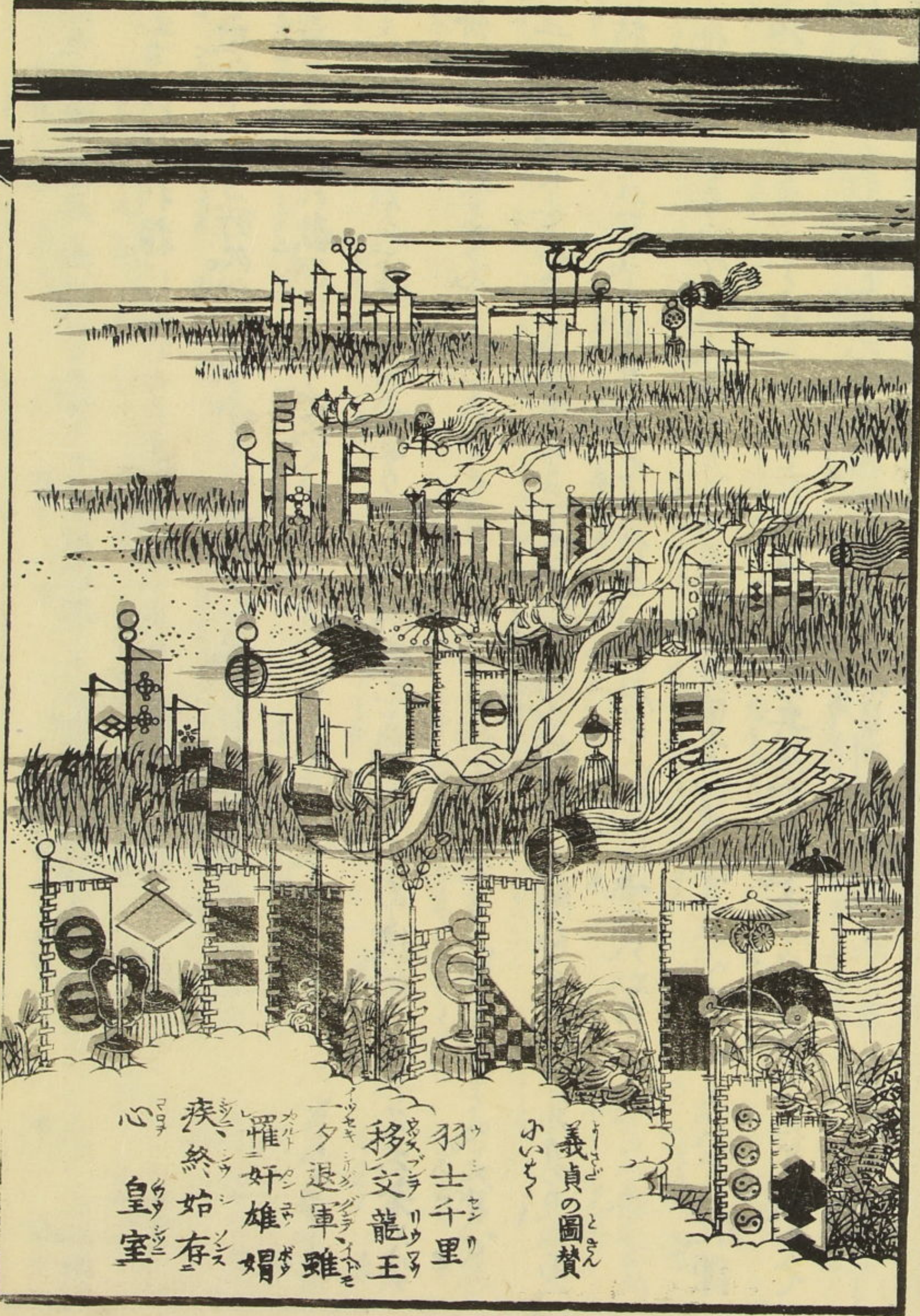
戰官兵遂挫黑丸城下白矢殞命惜哉

甲斐源氏下加賀美後貞の自五を勅む後貞君臣の後で尊下敢て其に従以由良
 松田も勅む後貞君臣に従て甲斐の三子源氏に属し後貞の愛を以て遠く

源義貞の治

始め新田小太郎兼貞鎌倉の催俊ふより一族郎従を引俱して千劍波の舟に乗り
 被城外に在けるを去り二月十一日先帝後醍醐 綸旨を賜ひて虚病を構へて必
 不敵の便宣の一族を密やかに招き集むるそのおかし相換入道の金矛四郎左近大夫
 泰家入道二十万鎊の遣兵を年一上洛。城内西面の札を法めん。鎌倉を進護ひその
 兵糧の乏しく近山の庄園に陳時の繰役を掛る。就中上野の。新田の庄世良田小太郎
 有徳の者の多しと。出雲介親連と。高浪丸四郎入道西人使節とて小末の大にとて
 建責ひ兼貞の事とて奇怪なり。敏のきと難人們の馬の蹄を踏さるん。後代まの和
 辱なり。と数多の人数を催して先かの西使を引捕。割。悪浪を斬て世良田の屋中。以鼻
 け。相換入道及び惜き新田が所業を捨あぶ。是より。妻家。花。慢。輩。大。丸。と
 曳出ひ。速に罰ひ。と武務上野の兵に命。新田の氏族を撃んとひ。兼貞。一。族。と

集め如何せん。後せほに成ひ。利根川を前ふ。防。と。い。も。あり。ま。の。時。の。勢。を
 と。敵。討。及。び。難。か。ん。ひ。と。ま。つ。此。地。を。選。ま。て。越。後。の。味。方。と。牒。し。合。せ。戦。ん。と。い。も。あり。平
 残。給。と。し。て。一。度。せ。ま。下。兼。貞。の。弟。服。屋。長。助。進。出。て。言。ひ。や。り。各。の。異。言。を。と。り。ま。つ。
 我。欲。さ。る。所。と。異。な。り。妻。家。先。帝。より。綸。旨。を。賜。り。今。我。兵。を。奉。は。さ。ま。り。い。ま。の。敵。の
 旗。を。も。つ。金。を。選。ま。せ。ん。と。比。怯。多。し。ま。と。利。根。川。を。前。に。ま。て。防。ぎ。よ。り。と。も。敵。の。大。軍。河。を。渡
 ら。ば。奈。何。を。入。さ。ま。と。宣。旨。を。預。に。頂。き。只。一。勝。あり。と。も。常。へ。打。出。て。我。兵。を。奉。入。小。勢。著
 ば。其。ま。に。鎌。倉。へ。打。入。る。若。勢。の。著。ざ。ら。ば。鎌。倉。を。抗。し。て。討。死。せ。ん。と。後。代。述。の。巻。に
 あり。あ。と。あり。と。い。ふ。その。坐。の。一。族。に。守。人。現。れ。ゆ。と。我。る。と。一。決。し。て。五。月。八。日。卯。の。刻。に
 勢。を。揃。へ。生。島。明。神。の。宝。前。に。綸。旨。を。披。き。と。奉。拜。し。と。小。旗。を。揚。げ。笠。懸。野。に。お。出。り。
 相。從。ふ。人。の。大。数。二。郎。宗。氏。子。息。孫。二。郎。幸。氏。二。郎。勇。三。郎。氏。明。二。郎。勇。三。郎。氏。兼。貞。に
 二。郎。満。貞。舎。弟。四。郎。行。長。忠。松。二。郎。種。家。重。良。五。郎。長。胤。服。屋。次。郎。長。助。江。田。二。郎

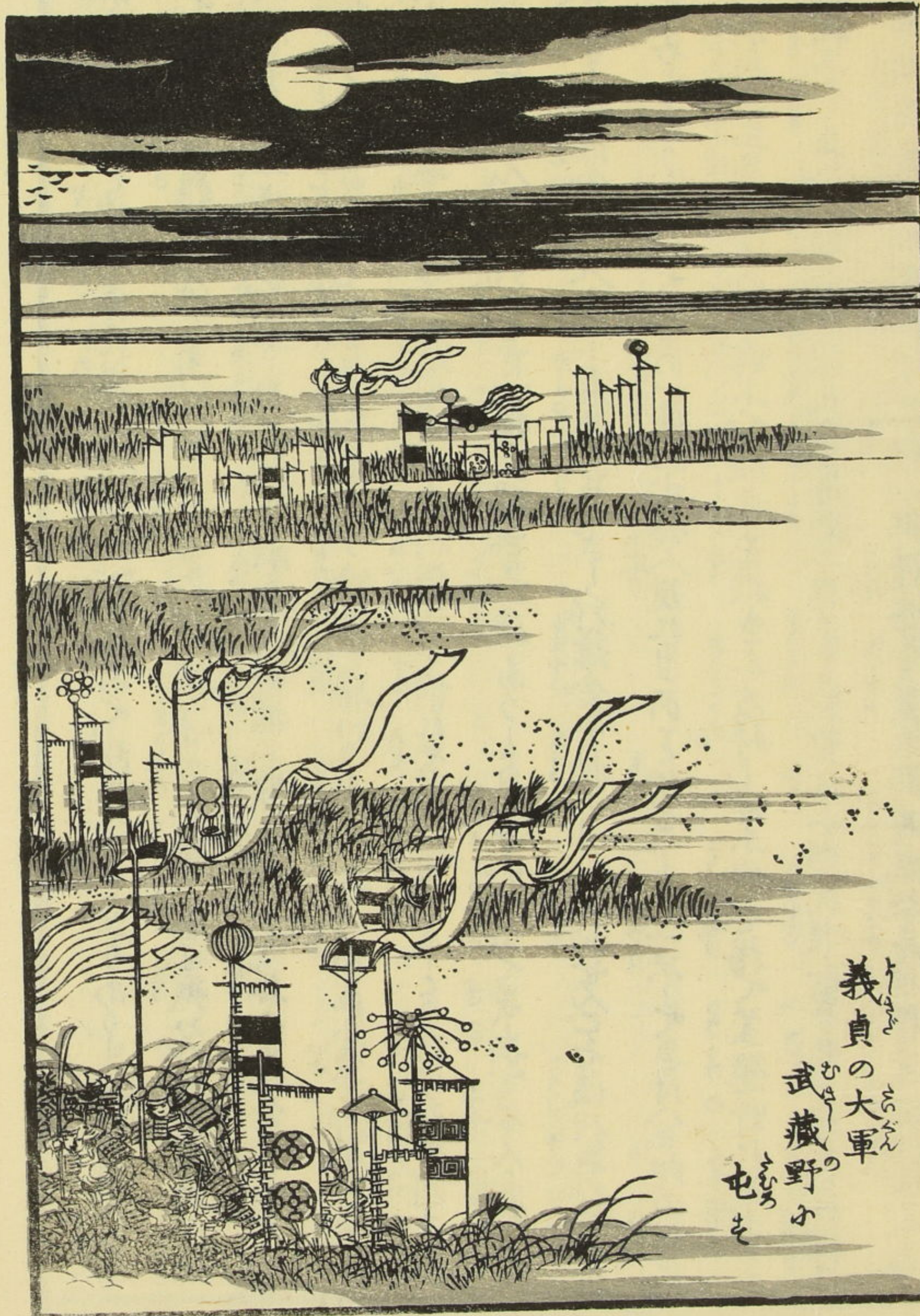


百將傳 又話卷之九

〇十七

義貞の圖贊

義貞の圖贊
 羽士千里
 移文龍王
 夕退軍雖
 羅奸雄媚
 疾終始存
 心皇室



百將傳 又話卷之九

義貞の大軍
 武藏野の
 屯

君五堂 義貞

行義桃井次郎尚長ととを宗純の兵とて。百五十餘騎を遣はりける。初めて如何
 と知り新に利根川の方よりして馬煙と夫を覆ひ軍兵二三千騎がらど。泥と地來る。
 騎を散敷とて所は然いあらず。敵後の一族里見島山岡中。大井田羽川の人々も
 我負兄弟大に敵びつてかく連る。一体のて後てより。若し敵一とあひあさる。箇
 様とのことよりて。緋不衣小起りて。羽儀を飛以暇もあはれ。敵の未著は実
 に佛神の冥助あらんと。勢よりうも。敵は彼人も馬と控へ初ま小圍て此のとき。大段と思
 ひ立り人々時月を移さば。森著あま一人の天狗は伏中を觸はれり。一族ありの取あ
 び。羅と向ひてはなり。と馬より下てて代あり。この敵の人数途遠き。かきあす。明日の森著は
 べ。他はへお出りしんとあら。この勢で侍りて。大井田をば言ひ小より。手はたせぬ。陳
 を張て。明はを遅しと侍ける。やどに甲斐佐藤の兵地加りて。五千餘騎のりけ。且つかくて
 如何の仔細あらんと。岡九村武井野へ出り。小島利吉民の子息千壽王。紀五郎左衛門

を從へ密に鎌倉を抜出り。二百餘騎にて馳著り。程もあらず。上野下野。上総下総。常
 陸武蔵の軍兵も招きざる。小雲霞のしく。馳來りて。暮方に至りて。四万七千餘騎と
 ば。さうの小度き武井野。月ハ尾表の末ち。て。列社を。劔戟の同より出で馬鞍の
 上を輝き。風小靡ける。旗の紅に人は。さ。鎌倉の。て。後て。敵内九國の。此の。と。う。
 藩籬の中より起ると。実に天下の大車と。金澤武藏守貞將。以。平餘騎を相副て。下河辺
 の。交下。さ。二。隊。へ。樓。田。治。部。大。備。貞。國。を。大。將。に。て。長。渡。次。郎。を。重。と。加。治。三。郎。左。衛。門。道
 小。方。五。千。餘。騎。を。副。て。入。河。向。ら。且。ける。か。て。我。負。の。武。藏。至。小。手。差。系。入。る。河。を。ち。渡
 樓。田。長。渡。が。兵。に。性。あ。ひ。夫。より。及。の。合。戦。小。原。平。五。に。勝。敗。あり。竟。に。鎌。倉。勢。利。あり。て。敵
 敗。走。況。に。放。て。新。田。我。負。逃。走。し。入。り。小。島。村。が。傍。に。龍。神。を。祀。り。海。面。忽。乾。干。渡。と。さ。る
 て。軍。兵。勢。を。得。たり。も。相。換。入。道。方。竭。て。二。門。自。害。に。及。び。て。我。て。太。平。記。に。詳。り。か。て。軍。功
 の。賞。と。行。は。し。新。田。我。負。左。衛。門。將。不。任。と。上。野。播。磨。に。封。せ。り。と。倉。平。長。助。の。後。河。を。賜。る。

我々の教程より是利を民僭上りよつて治を受け。後貞東國ふち向ふ脱けり民敗る。
 危ふり由供福あり。頻り小成威を展ず。後貞更に敵一が。東陣へ引返り。民
 遊義勝に亦。東陣へ入る。主と敵山に遊る。後貞正成とを保護。夫より
 計を施す。是利を返下。尊氏と目小對する。後貞を丹波路に走らす。脱け。
 東山より入浴。小尊氏兵と洞へ再び東陣を襲ふ。後貞頭家正成の。
 抄及豊後河原に敗る。氏兄弟大に敗る。九州小もはる。氏九玉の兵と督。
 八十万誘にわたり。水陸より。時後貞命と受て。目と兵庫の。防。
 寡敵せど大不敗。東に敵。圍。事入敵山に遊る。氏軍路に。禁。
 ふ。貞一箇の縁を後け。賊軍の糧道を断。之の機。時を候。諸。期。
 と攻。高陣。守。失。小。陳。既。た。至。は。氏。の。眼。長。土。波。悪。源。太。万。死。入。
 て。戦。入。官。軍。大。に。勝。易。小。陣。遊。ま。敗。兵。と。集。め。堅。根。に。防。ぎ。城。小。官。軍。の。く。度。と。

失ふ。爰に後貞諸方の。の。期。を。逆。る。を。知。り。以。服。屋。後。助。和。長。年。を。副。わ。り。て。打。出。る。
 小。賊。軍。大。小。進。ひ。戦。ふ。連。に。指。揮。し。て。之。を。敗。れ。頼。朝。東。寺。の。門。下。に。到。り。氏。に。斥。候。を。
 知。り。大。に。尊。氏。を。呼。ぶ。て。之。を。連。年。天。下。兵。革。を。苦。し。む。罪。の。民。人。を。殺。す。唯。吾。と。汝。
 と。在。り。今。吾。と。汝。と。戦。ひ。の。所。に。て。雌。雄。を。決。せん。頼。朝。出。よ。と。大。喜。舞。に。罵。詈。を。受。て。是。
 利。を。氏。連。に。出。て。戦。ん。と。之。を。重。信。等。号。を。諫。め。後。貞。謀。計。合。期。せ。ど。大。小。味。方。の。敗。る。
 を。り。君。と。我。ひ。の。辱。と。雪。め。んと。ま。窮。前。猫。を。咬。の。勢。ひ。あり。と。之。に。對。し。ま。り。ん。と。也。
 之。を。不。知。る。と。鑢。に。推。つ。ま。は。め。不。け。と。尊。氏。怒。り。解。て。竟。に。出。て。戦。ふ。と。平。と。て。後。貞。
 の。後。を。替。へ。む。後。貞。固。陳。を。あ。り。て。之。を。防。ぎ。且。賊。軍。を。突。敗。は。周。て。賊。軍。大。に。怒。り。忽。ち。小。
 周。け。脱。け。後。貞。逃。く。困。を。脱。し。に。帰。る。と。海。を。是。より。後。足。利。氏。の。小。傳。り。の。り。と。亦。
 福。を。り。天。皇。に。奏。し。降。洛。を。許。し。多。ひ。く。後。貞。恨。ま。す。以。あ。り。別。恒。良。親。王。を。托。し。北。
 山。に。赴。く。む。後。貞。稍。怒。解。て。太子。を。奉。り。越。前。の。金。ヶ。崎。に。到。は。如。途。中。に。大。雪。に。あ。り。人。馬。多。

凍死せり。能く金傍に及ぶ。の困兵を。一折小あえ。藤原の。と。義興。二千餘兵
 を。虜。て。後。小。赴。り。あ。助。れ。一。千。騎。を。虜。して。瓜。生。保。が。山。の。城。小。入。ら。し。む。于。時。足。利。高。事。
 間。を。放。つ。て。保。心。を。初。り。む。保。志。を。事。に。通。り。あ。助。小。及。ま。さ。り。保。が。弟。義。隆。房。ま。志。と
 猶。さ。ま。保。が。及。心。を。告。義。助。が。子。義。治。を。雷。志。の。時。を。伺。ひ。て。奪。せ。ん。と。も。義。助。流。し。て。金。傍。傍。に
 帰。る。是。より。帝。系。師。を。通。と。て。若。野。に。入。り。て。あ。え。保。お。び。北。玉。の。諸。士。ま。く。あ。自。に。虜
 け。と。ば。屢。威。を。着。ひ。け。り。義。治。新。善。光。の。城。を。隔。と。高。事。逃。亡。せ。り。と。も。後。降。恭
 の。兵。勢。強。く。瓜。生。保。及。び。義。隆。房。敵。前。の。數。突。に。死。せ。り。春。月。金。傍。陷。落。し。る。良。親
 王。乃。び。新。田。後。蹟。自。殺。せ。り。あ。自。兄。弟。小。入。在。て。敵。前。の。諸。城。を。降。し。且。く。威。を。着。ひ。け。り
 とも。尊。氏。の。根。を。固。う。て。汝。國。と。も。は。屢。事。を。り。て。敢。て。承。久。の。功。を。以。て。國。七。月。二。日。に。至。り
 思。乃。の。城。を。攻。り。と。も。自。矢。小。出。り。と。波。一。久。あ。自。世。の。功。に。於。り。一。朝。小。盡。り。と。も。汝。去。に。あ。り
 の。く。是。と。省。く。蓋。毛。詩。小。新。謂。皇。と。干。憾。者。あり。この。傳。を。讀。者。誰。も。涙。を。墮。さ。ら。ん

楠正成

人皇九十六代 光嚴帝延元元年戰死
 今安政三辰追 五百二十一年成

楠正成者本姓橘氏有忠義之勇有籌

策之功其守城野戰之勞皆是勤王之

志也人悉知之不贅此

人皇三十一代 敏達天皇曾孫攝 諸兄公十二代伊豫 印代橘遠保十代 之孫	橘正成 左近衛大夫	正成 交野兵衛	正五位下河内判官 正成及征々々 旗紋菊水	正氏 淡川に討死	正季	正行 帶が左門尉	正之 二郎左門尉	正儀 左二門尉	正勝 左二門尉	正元 楠小太郎
--	--------------	------------	----------------------------	-------------	----	-------------	-------------	------------	------------	------------

本朝通記楠公淡川に戦死の條にのり。正成忠貞絶千古計策通於神遇於妬不
 改忠志陷死地不失勇武可謂古今絶倫之賢臣本朝無双之良將矣累世
 以智仁勇称之亦不借言就中可其称举者慮可朝廷之起興運則守孤墨
 待時到察可其哀之運則以躬報朝恩苟非通于人道之理乱達天道之盛
 衰豈能造于此乎後世根議擬戰輕投一命英雄之心地孰人察之乎惜哉傷
 哉天不資王室矣蓋兼筆歎乎と云々なり

補正成の語

建武元年春二月諸卿獲りて之を。後軍卒の恩賜ハ遲滞に或るとも。まづ大功の諸卿に於てその賞を定むべしとて。檢非違使左衛門尉に任じ。按津河内西園を賜ふ或ひは。いさく泉抄河内州小封公と號する。尊氏東及ふ再び礼を記せに因て。義貞正成をして。進討の宣旨と賜り。この大敵を討ぐるといふも。義貞竹の下の戦ひに利あり。その氏福威を震ふに及び。奉を保護し敵に食り。そまより後。肺肝を摧神機抄算の奇計を設け。さうに威勢破竹のとき。その氏連及が軍を退け。奉と飯沼をさしめけ。その時律儀を雇て。戦死の尸を辱れ。あ世にの泣男を用うるの術計。更に入寇の表に出。敵軍を疑惑あさり。且懈らしむるに。は漢の子房陳平を再びこの世に出はるといふも。孰うこそが右に出ん然と。由智運の衰ふるに。いかに如何とも。まきまき。その氏丹波のものを。義貞に謂て。いそ。その氏已に腹を破は。速小進ハ獲つべし。といふ。田里見も應て。いさ。兵とい

い日金鐵にあふ。この軍士も疲敵う。これを進ずとも勝利をけん。と正成まづ推返。我液と。彼も疲え。賊軍の怯意。こび積生。其後難剛。えう。いと。練む。ま。その義貞。種正成復北園頭家。このことを説く。頭家。このことを釋して。いそ。賊を討む。その節度。は義貞にあつて。我れあふ。いと。正成奈何とも。ま。奉。律儀。の不及。その氏再び。率を集め。東陣と。發しんと。強け。る。義貞。頭家。正成の。この命。を受て。軍。義貞。於。河。内。に。率。及。と。戦。ふ。雌。雄。い。ま。ま。決。せ。る。時。正。成。敵。を。討。て。神。傍。より。回。り。敵。の。後。に。出。て。撲。て。攻。む。連。及。防。ぐ。と。往。き。ま。で。大。に。敗。れ。て。漢。川。に。還。は。正。成。義。貞。と。兵。を。合。す。ま。打。出。の。宿。に。破。る。其。氏。兄。才。力。屈。し。艦。に。乗。り。て。筑。紫。に。走。は。正。成。一。致。不。敵。を。退。け。義。貞。に。謂。て。い。そ。功。ハ。成。難。う。く。敗。は。易。く。操。ハ。得。難。う。く。失。は。易。し。必。破。竹。の。勢。ひ。に。ま。で。往。て。ま。ま。を。奪。う。六。一。奉。く。賊。を。屠。ら。ん。今。忽。し。く。時。を。違。し。其。氏。再。び。勢。を。振。り。大。軍。を。う。んと。練。む。ま。ま。の。義。貞。の。妻。の。別。を。惜。む。西。に。出。は。の。ま。ま。正。成。復。練。む。ま。ま。の。軍。の。心。内。侍。不。在。て。敢。て。西。征。の。途。に。塞。ぎ。て。萬。世。の。功。



楠家の一族
 戦死 湊川小
 嗟吁 夢賚之良
 我鯨 鯢替中興
 千載 將壇山
 斗三世 王室
 干城

楠正成の
 圖賛ふへそ

一ノ巻 一ノ巻 一ノ巻

君玉堂 権

を棄は何七亡女の戒を顧まらやといひけしは、其大に愧はるありといひ、も積果まぞ
 按に差りしを、氏見才、流紫に送り、兵を誓ひ大挙して、攻奪は朝廷まことの西に防ぐ
 べし、今せうは、ま下正成流紫の軍統を去く、あつに防ぎ難きこと、あつて一の孫を
 つけ、と、防門清忠ことと拒む。幸もま、陸のつと、固て正成必死を決め、櫻井の込に於て
 その子正行を河内へ帰し、淺川に陣して大敵に對し、終小一決死する、人のよく知る所多
 補ことより、後のとら正行正後の小傳に、或人、とく補正成、毎度軍功あるのこち、手
 前、の、とく、半人の、及ぶ、る、智謀あつて、人の耳目を驚かす、後世にありて、軍略多勇の
 とく、人、とく、あつて、然れ、あつ、た、幸の、船、を受け、旗を赤に、一とき、左右前後、多敵、り、く
 一人の、援、る、者、あ、つ、を、二人、孤、墨、に、終、つ、と、系、謙、念、の、大、軍、を、引、け、更、に、勤、せ、ま、と、數、月、を、守
 ば、よ、や、軍、謀、智、略、あ、つ、と、由、人の、和、を、得、る、に、あ、つ、す、は、幸、の、妻、時、也、は、あ、つ、と、人の、和、を、得、は
 と、い、ひ、と、半、生、の、行、ひ、と、民、に、幸、惠、を、施、ひ、に、あ、つ、ま、と、戦、死、の、後、に、あ、つ、王、室、月、に、哀、へ、て、諸

國、ま、北、朝、に、帰、し、官、軍、僅、に、紀、路、の、諸、城、ま、と、流、紫、に、棄、池、の、志、操、を、あ、つ、保、ち、つ、り、と、
 是、と、又、身、滿、將、軍、に、降、り、紀、路、の、諸、城、を、落、つ、の、後、に、補、家、が、千、劍、彼、の、一、城、固、く、父、祖、の、遺、
 誠、を、守、つ、下、せ、し、も、勝、は、と、わ、く、攻、ま、ど、も、落、つ、と、あ、つ、累、年、忠、孝、の、名、を、あ、つ、つ、偏、に、正、
 成、が、修、光、に、て、民、人、ま、家、に、懐、く、が、故、なり、依、て、以、補、正、成、家、臣、の、うち、廉、直、に、て、實、野、下、
 者、更、に、私、を、ま、ま、老、を、擇、ま、一、郷、或、ひ、一、郡、を、守、ら、し、貢、税、を、あ、つ、ひ、政、事、を、あ、つ、と、小、河、内、を、
 何、と、の、里、に、や、一人、の、農、吏、あり、と、の、家、極、め、て、貢、け、け、し、と、も、天、性、至、孝、の、者、あり、と、老、る、母、を、養、
 ひ、ける、と、その、母、の、頃、疾、病、に、罹、り、次、子、に、悩、み、泣、き、つ、と、その、子、が、大、に、息、を、聞、へ、て、針、灸、茶、餌、に、心、
 と、竭、せ、し、固、り、貧、窮、の、故、に、念、を、心、の、ま、は、り、性、も、達、人、目、救、ゆる、や、ど、れ、病、ひ、重、り、と、あ、つ、令、
 且、夕、不、迫、と、看、て、天、不、作、き、比、不、備、と、歎、け、し、も、給、方、り、然、ら、し、と、の、漢、他、郷、より、こ、に、來、り、
 一、西、人、あり、と、の、容、飾、を、あ、つ、て、子、に、あ、つ、つ、ら、れ、由、雅、治、の、志、と、い、ど、も、我、業、を、施、ま、つ、十、に、八、九、の、清、
 一、と、い、ひ、ま、と、の、業、船、來、り、て、價、貴、し、貧、窮、の、故、に、う、り、ひ、せ、と、播、て、他、方、に、あ、つ、り、
 一、と、い、ひ、ま、と、の、業、船、來、り、て、價、貴、し、貧、窮、の、故、に、う、り、ひ、せ、と、播、て、他、方、に、あ、つ、り、

百將傳 一ノ巻 一ノ巻 一ノ巻

〇三三

洋 玉堂 権

一非作... 君...

あ。袖を拂つて... 母に共へ... 黄金十枚... 田枕あり... 柳若悩の地... 黄金を海へ... 勢半の減...

黄金を海へ... 勢半の減... 黄金を海へ... 勢半の減... 黄金を海へ... 勢半の減...

新編... 結...

けし。盜とて他小治るむ。今も老母も疾病をて。人並にありぬ。下僕刑罰小行さる。後て憐れむ。あつと。少くも。言け。官使い。農夫。至孝の心を憐れむ。その罪を述べんと。國家の刑法。奈何せん。その事。正衣に併け。正衣に併け。歎息。か。孝子の世。不幸に。老母。病ひ。他の馬。至。嗚呼。誰か。一郡。指揮。夫。の。て。救ふ。夫。の。田。と。深。く。の。馬。を。返。す。求。る。者。金。を。返。す。彼。孝。子。が。質。入。る。田。を。償。ひ。彼。に。よ。る。他。小。物。を。受。て。至。孝。と。せ。は。且。の。西。陣。を。重。き。病。を。さ。る。効。の。事。と。西。仁。術。と。い。ふ。の。の。不。仁。と。の。憐。れ。を。返。放。つ。と。不。放。て。母。子。の。程。是。と。親。人。あ。り。且。國。主。と。作。き。貴。を。使。を。慕。ひ。備。車。あ。り。俱。に。死。ん。と。心。の。程。不。誓。ひ。け。の。修。補。の。仁。政。ま。け。と。と。願。ひ。て。有。く。の。三。

那和長年

年曆正成と全

那和長年者伯州之豪也元弘年中後醍醐帝逃出隱州微幸伯州長年奉迎之以

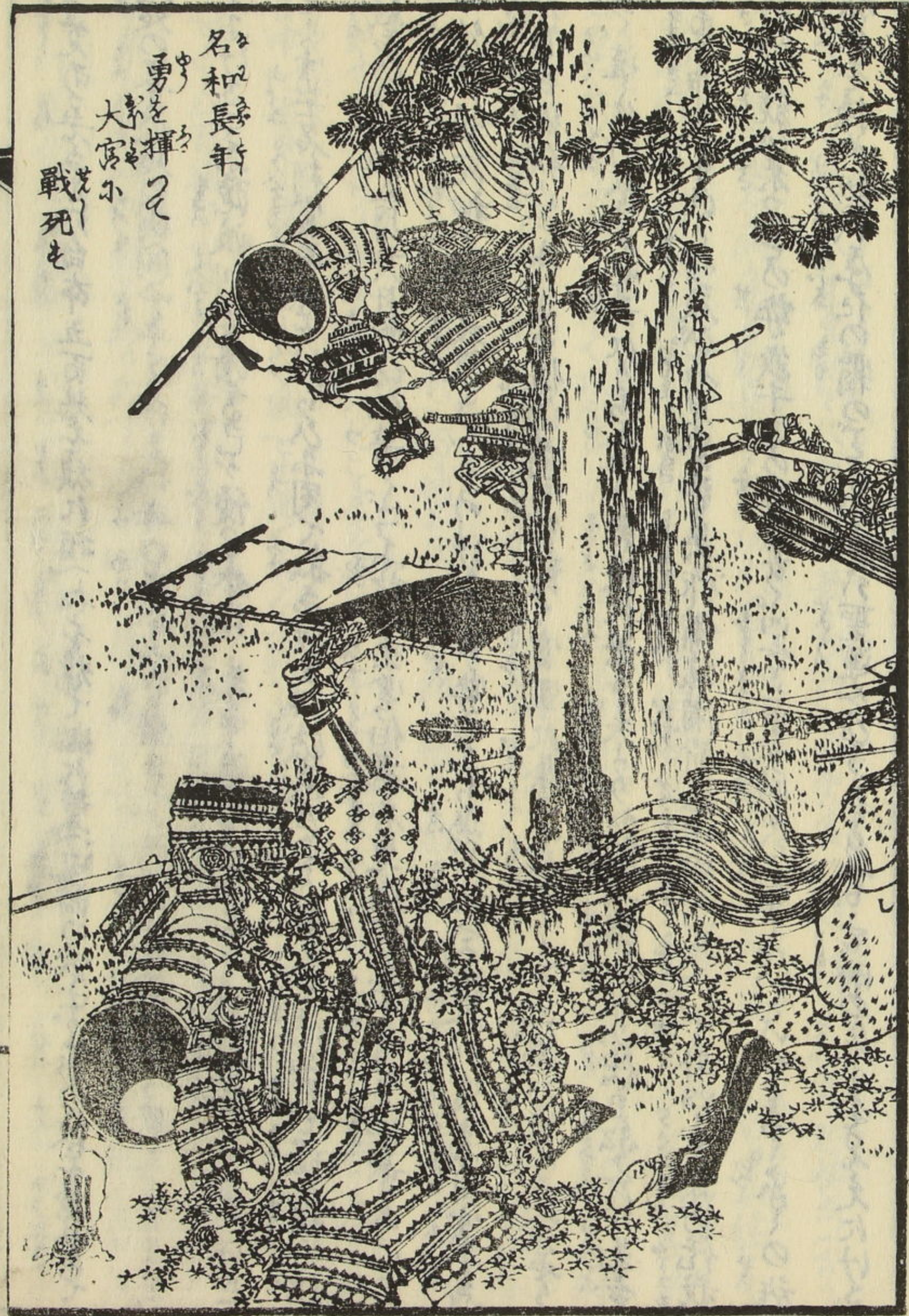
船上山為行宮而破賊兵因賜因幡伯耆

兩國建武之役最勞軍務戰死

母は小人為實隨に。名和長年初の。長高伯耆名和の人村と。弟の。具。年。親。五十五世の。高。を。以。て。村。上。氏。に。托。以。父。行。高。弟。祖。父。行。杖。承。久。の。後。王。所。に。隨。て。東。軍。と。守。治。に。樂。む。北。條。氏。の。為。に。倉。邑。と。刺。ら。る。長。高。名。和。の。地。頭。と。す。勇。健。し。て。射。と。善。以。家。富。族。度。一。ま。と。入。る。と。さ。は。村。上。源。氏。小。に。最。き。族。と。り。

其先詳す

那和或名和作ル
長年 又木郎 伯耆中
長重 小太郎 左門尉
長生 小太郎



名和長年
勇を揮つて
大宮小
戦死す

百將傳一ノ巻

群玉堂藏



長年の圖賛
潜龍飛出海島 舉族首
唱征討 計畫行在安危
忠義満山
旌旗

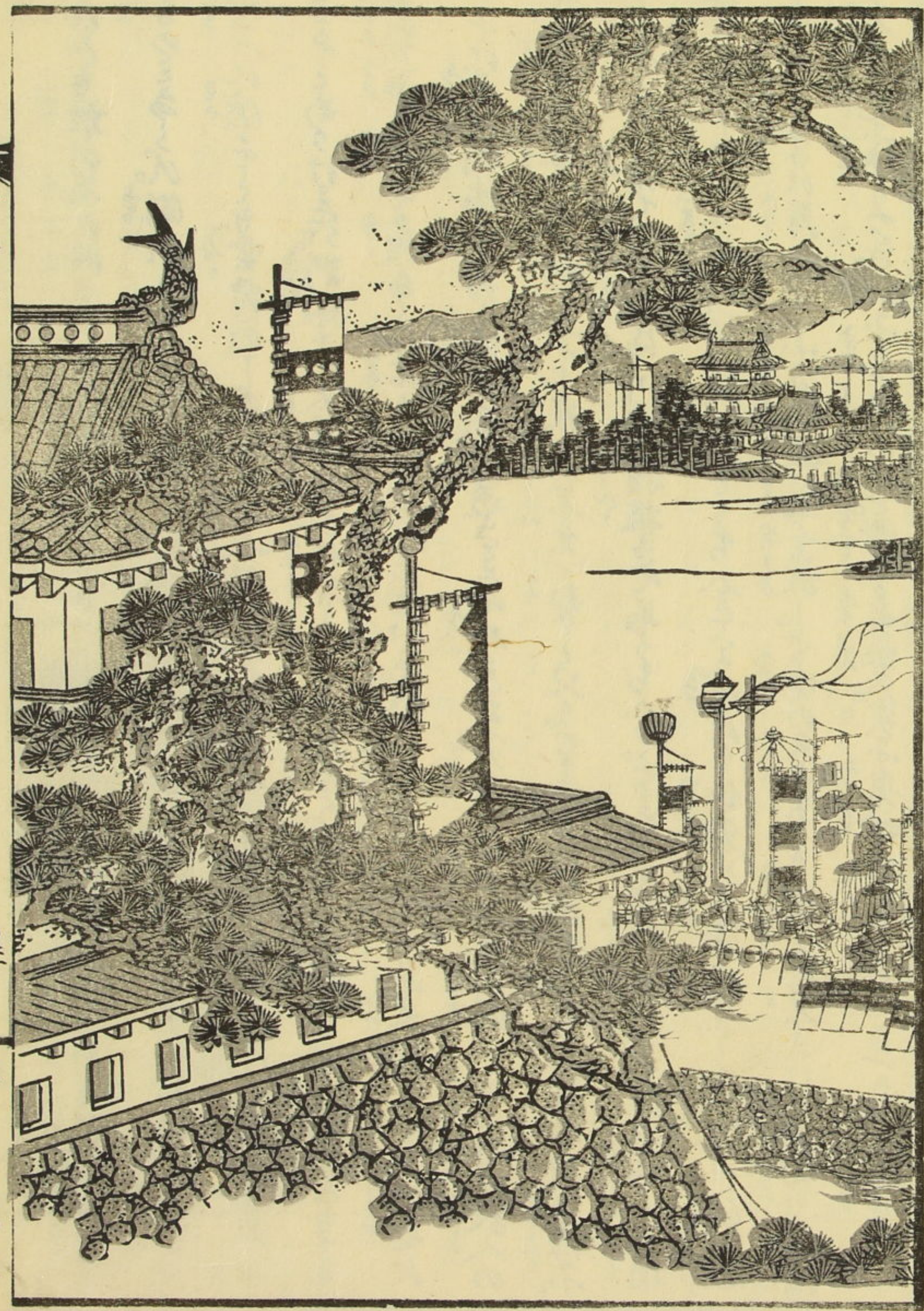
名和長年

百將傳一ノ巻

群玉堂藏

女是あつるを白布五百巻を旗に捲く松を焼て烟に焚く近國の武士は家の奴を掃蕩て
 此處の峯後地の樹木を伐りて峰の頂に立上りて火を焚きてこの火に敵軍を誘ひ入りて見
 えおけりて不徳夜判官清きもしが預り奉は。朱事通きをのりて遊蕩人となりけり
 富士各判官及總計らひ不周へ船をけりて後山をさぐりもあつた佐伯と遊し頼て船
 の船をけりて月共八日合はれ著く。不於て出雲伯耆石見周防の軍兵を地集まてこ
 千竹誘船に神をきて攻落さんとうける軍勢のうち邊に切る徳谷判官高貞富士
 判官及細朝山六条まは佐渡前司もあつた官軍に屬して敵とあつた今更にまきさる
 る遠く打成さる。舟にうちあがり若使に著き夫より數度へ渡り行り。徳も船をけり 朱事
 の面着きまはし及び石見安藝美作備後備前中周防長門外四九州の佐我
 前公と競ひまはしその勢敵千の強さ。四方に里が回れ人あはれこのてあつた家々の旗
 旗天を挿め 劔戟尾花の霜のどくかくて聖運をひらきせるも。今時のるこをえにける。

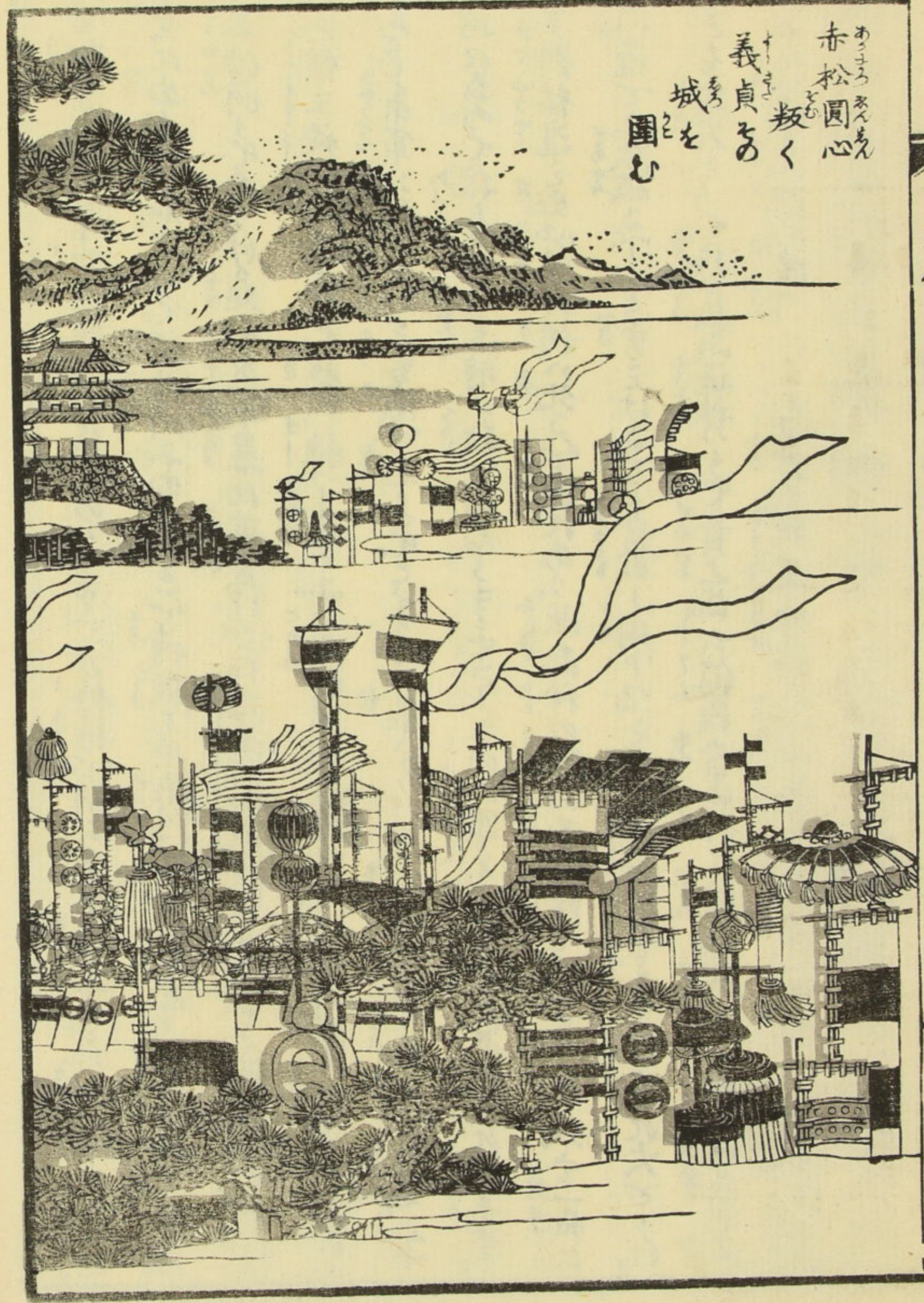
ことよりして長年兄弟新に成功を著る。その勇名一時に傳え教軍を憐れふらう。
 かくて 聖運を用る。長年その功大まは周備伯耆の両邊を揚ひ伯耆守に任ぜらる。
 その頃時の英傑を二本州に移けり。二本の楠伯耆結城一州の千種なり。かくて尊氏統
 率の大兵八十万誘て率て攻登はあより。出雲伯耆周備の兵三千を以て敵軍に出る。この時
 山崎の軍利あつた賊軍希ねて勢よする。主上八山小遊り名和長年長と遊し小敵
 山に到る石武多り。是共二百誘を徒へて巨利の勢を破は賊軍長年が旗旗を以て遊
 かくて敵軍と處なり。長年行戦ひて。まを挫くと十七回連に突て禁闕に至り。馬より下りて
 宮中へ巡見し誘を垂きて闕へ出地て山と小到りけり。我に続ける兵多。四面八隅敵とあり
 一と二百誘の小勢なり。遊し官闕に到り拜ひ尋常の老の老まき。この一事より
 長年が英雄別殺をかりぬべ。此年 延元七月山小在る所の徳伯耆を定めて賊を替に
 その針果合めせ。長年の長貞が隊にあり。長貞素寺の門下に入り。その氏を呼ぶて後賊



百將傳

〇北

洋玉堂藏板



赤松圓心
義貞の
城を
圍む

百將傳

和玉堂藏板

より多勢となり山心大に威威と震ふかくては聖運で岡をのびて一統の後軍功の賞に行
 はれり大塔宮則祐とて山心と語りしとき若忠威の功あり備前播磨に封せんありま
 主との相上り如此との論旨を述べたるに山心若忠威と云ふ家の為に功をまじり恩賞仔細
 おぼしめされ相違して佐用の莊一箇所を賜ふのころ始より補任する播磨の守護
 職を傳らまはせしに山心大ふとて悲と君を恨み奉つる言氏連受この後に美作の大莊に
 箇所を赤松山心に與けしに保とて是利不親と厚く謀叛の時に及び朝家と教まて是
 利に屬し固て官軍を難く主上の竟に芳野不入て激とてまをせりひけり

傳ててこの恩祿のこゝに御穿袷せし時とて多々准后の口に入あり護良屋山心
 不勅約のこゝに昔よりと奏させしもの母后と准后と快うねる護良が奏とい
 へし護良のこゝに婦人の長舌を家と系に相漢の先遊是のころ山心賞の爲に恨
 君不叛ら不忠まると君又功後に祿と香と論旨を食のよびて復る人深く味ひべり

宇都宮公綱

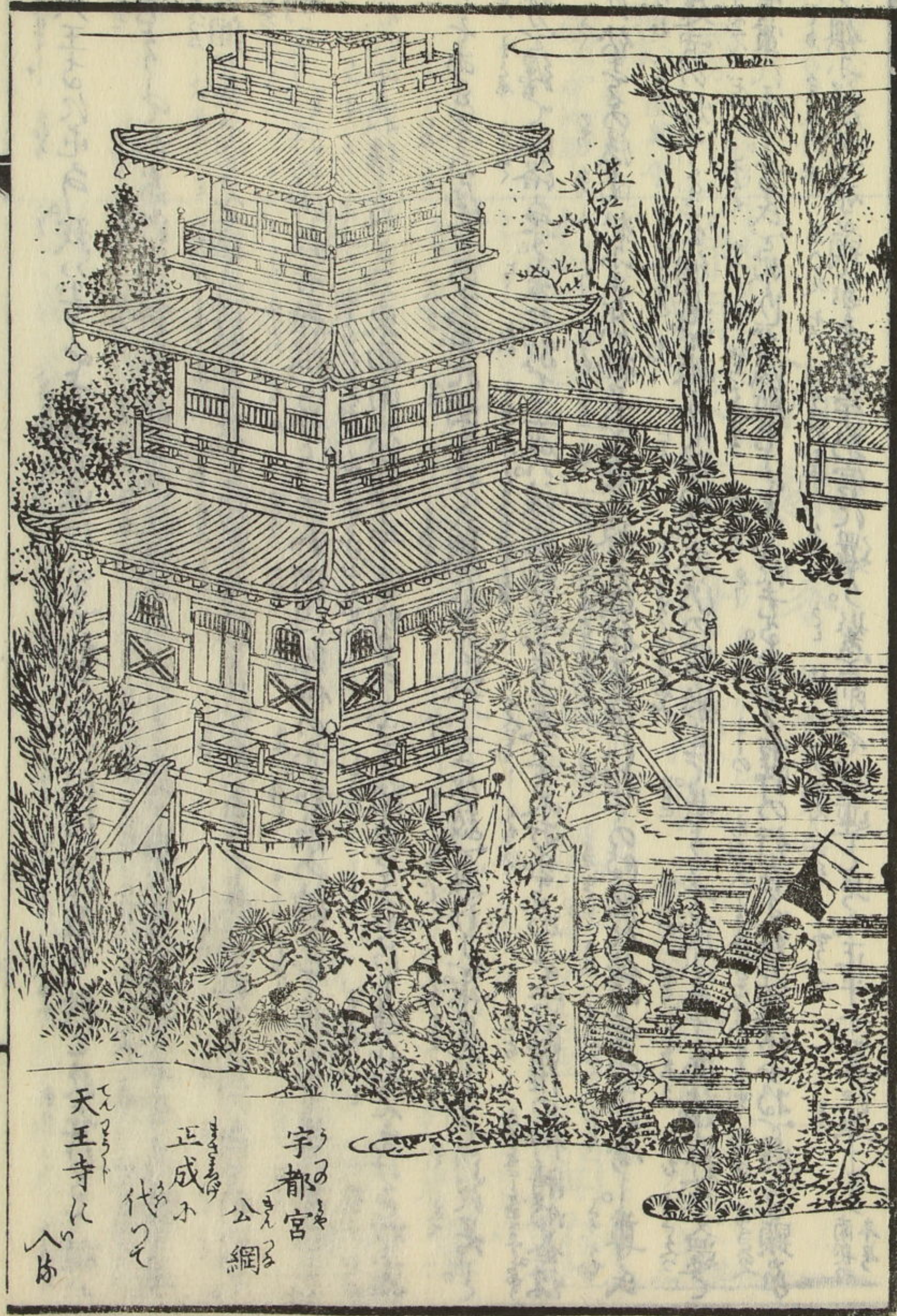
人皇平代 後光嚴帝延文元年卒
今安政三辰逆 五百年成

宇都宮公綱者姓藤氏與正成欲戰

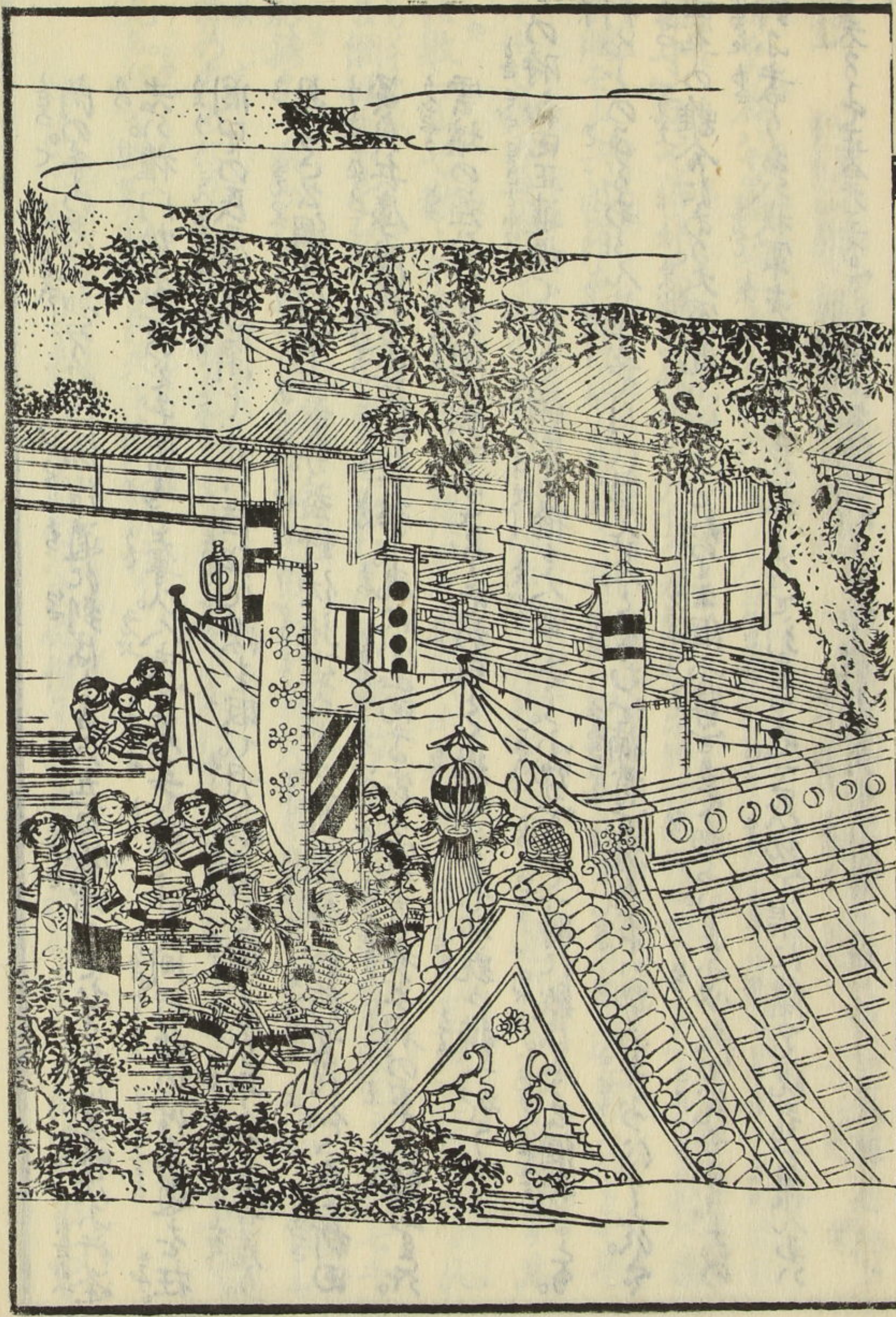
于天王寺不果其後軍事若干

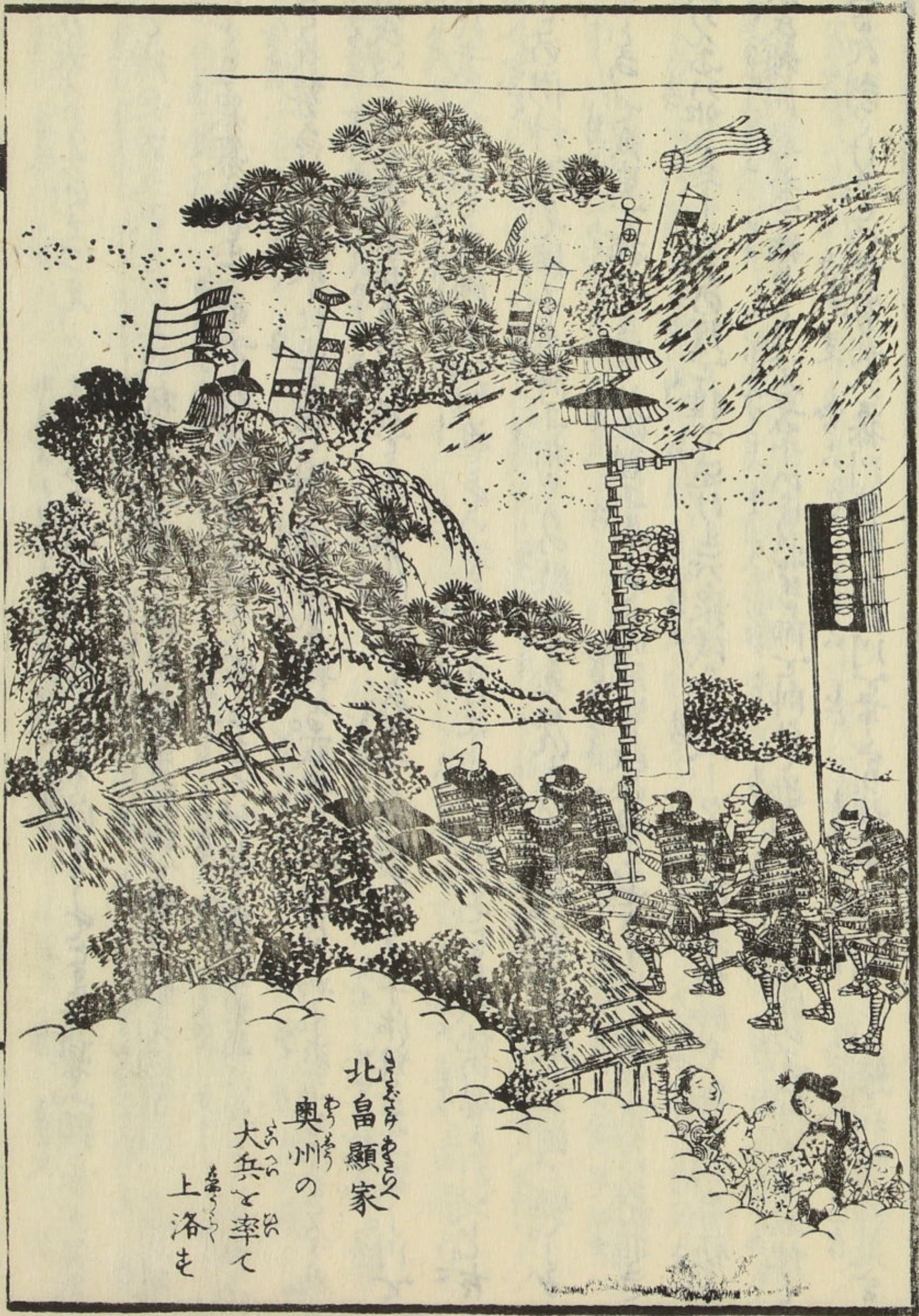
藤原朝 宇都宮
朝重 左兵衛尉
法名蓮生
五代孫 備前權守
貞綱 從五位上
宇都宮檢校
蒙古討手大將
公綱 宇都宮
海部大將
從四位少將
氏綱 下野介

傳へての公綱千鈞破の勇ひれかりしに大將阿曾連平少弐治時大佛右
 馬助高直金澤右馬介貞春に評議してこの故に播磨にへしと切洋の下より
 掘りけるま下女を嫁ししに間隙を入ぬの暇をけしと捕りしを以て大
 手の矢倉一とて掘崩し既に身は城中へ逃入りしけしと大木大石を擲りけ
 てよく防ぎしけしを女多きとて是れおと死す老殺を知らば然れども公綱が工
 夫を以て構一とて掘崩ししりけるし一のまをりしりげり云云



天王寺
 正成
 代
 宇都宮
 公綱





北畠顯家
奥州の
大兵と率て
上洛を



大軍と率て八幡を攻む一時に漏落さんと云顯信義勇しく守つて迷はれ援を
 經るやどに顯家敗卒を集めて天王寺に起す八幡の援兵とせんや師垂初と云ふも
 兵と分て八幡を圍すめ自才天より赴きて雌雄と一戦を決せんとい顯家が軍大札を兵
 士四方に散せし顯家僅に股肱の衆を干渉誘はれてまが芳野へ赴くとい馬の鼻を向
 小降速氣早のおるは夫と素く士卒を進めことと遊ふてまを急あり顯家馬を回して奮
 奮突戦時と後一敵不支はしれ回大に勇威を奮ふといとも從卒多く討たると他不援
 兵多くその才金織小あらざるは渾身殺箇所の瘡を留めて竟に安倍野に戦死せり時
 之十一歳降速が軍旗尾四郎左門武孫政清がその首を獲たりとい顯家皇命を承て
 賊を討し殺不功と得て王室の再興近き小あらはるべし一戦不利と失ふは安倍野の處
 と清の人の呼天なる哉命なりといふ

日本百將傳一夕話卷之九 終

